こそ、少しでも能率よく成虫に育つよう守ってやろうと〝ここ掘れワンワン〟みたいに私など一枚一枚の枯葉を一日がかりで全部点検しては、幼虫を集めて、持ち帰って、小生宅のエノキで飼育し（この目的のために、筆者は自宅にエノキを栽培している。）終令幼虫にまで育てると、また幼虫を元の郊外のエノキに戻してやっているのである。成虫になるまで自宅で飼育しても良いのだが、自宅で育てると、かわいい緑色の幼虫の最後の時期になると、何となく透き通ったような感じになってきて、やがて蛹になる際などに、どうしても一部は蛹の尻尾をうまく支えに引掛けて、ぶら下れず、自ら墜落して死んでしまうものが出て来るので、一番効率の良いのは、やはり蛹化前に幼虫（終令）を天然の郊外のエノキに戻してやる事だと思っているのである。彼等は最終令の幼虫が何だか透き通ったような感じになって来ると、ほどなく最後の脱皮をして蛹になるのだが、その直前に、枝や幹などの適当な所へ糸を吐きかけて自分のぶら下がる台座を作り、最終脱皮の瞬間に、実に巧みにくるりと向きをかえて頭を下にして尻尾を、その台座に引掛けて、さかさにぶら下がるのである。尻尾にはフック状の構造物があるのだが、これを台座に引っかけ損なうと、転落死と云う破目になるのである。この経過を全部小生宅で送らせると、やがて蛹の中の模様がわかって成虫がオスかメスかが、羽ばたく数日前には分って嬉しいのだが、しかし、一匹の無駄死も出さぬためには、やはり幼虫の最後の頃に、天然の郊外の木へ戻すのが最良では？と考えているのである。

当然これらの事をするには大変な手間がかかる。前日、手術などをして、午前2時頃、帰宅した日でも、朝は早くから起きて、彼等の就餌状況や、鳥が彼等を食べに来ていないか？などを観察するので身も心も休まる暇がない位だ。だが、集めた幼虫が大きくなり、小生の家からもといた郊外の天然のエノキに戻され、かわいい緑色の漫画のような頭をふりふり、〝今まで有難う〟というように木を登って行き、やがて附近に雄大な、その飛翔の姿が見られると、本当に、これまでの苦労も吹き飛ばされるように嬉しいのである。だが、戻した幼虫の中にも時々、春に目ざめないのが出てくるのはさびしい事だ。春が来て、エノキの葉の芽ばえる頃が、大体、オオムラサキの幼虫の活動を始める時期に一致している訳だが、幼虫が越冬していた時の自然条件の差で、なかなか一斉に成長し、茶色から緑へと脱皮して成長して行くという訳にも行かないのだ。一部の幼虫は成長ホルモンも関係するのか、エノキの葉が大きくなり、仲間がどんどん大